

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# 中世王朝物語における「火影」～印象的表現をめぐって～

著者	市東 あや
著者別名	SHITO Aya
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	55
ページ	75-94
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010618/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010618/</a>

## 中世王朝物語における「火影」～印象的表現をめぐって～

文学研究科国文学専攻博士後期課程3年 市東 あや

### はじめに

物語において、灯火の光、もしくはそれに照らされた人物を指す言葉として「火影」（もしくは「灯影」）という表現が用いられることがある（1）。似た用法の言葉に「月影」があるが、「月影」と違って歌題ではなく、散文中の用例も少ないことから、先行研究の少ない語の一つである。特に「火影」のみを主眼に据えた考察は、これまでほとんどなされてこなかったと言っても過言ではないだろう。

そうした中でも『狭衣物語』『夜の寝覚』の二作品においては、特に人物を指す譬喩としての「火影」の用例が多く、「月影」との比較という形で論じられてきた（2）。男女の垣間見や逢瀬の場室内の景物として灯火があることは珍しくなく、その場で灯火に照らされた時、もしくは後になって回想・思慕される時に「火影」を用いて人物を表す例がほとんどである。

ではこの二作品以外の「火影」は考察に値しないのかといえ

決してそうではあるまい。たとえば『源氏物語』には「火影」の用例が十七例で、数の多寡でいえば決して少ないものではない（3）。更にこの十七例のうち、灯火に照らされた人物を指すものが七例存在する。『狭衣物語』の十三例中十一例、『夜の寝覚』の十五例中十一例に同様の例が見られ、数としては劣るものの、先行作品としてはそれなりの数が認められる。また、異なる二作品に同様の用法がみられるということは、これらの前後をも検証することで、作品同士の影響関係や表現史を新たな観点から確認できる可能性がある。本稿では『狭衣物語』『夜の寝覚』を中心に、物語作品における用例を再検討し、特に登場人物を指す譬喩としての「火影」という表現について考察をおこなうものである。

### 一 『源氏物語』以前

「火影」という語の表現性が格段に高められたのは『狭衣物語』

て

からであるという、倉田実氏の論がある。倉田氏は物語中の登場人物、特に女君が垣間見や逢瀬などの際に灯火のもとで印象的な映像としてとらえられ、後にその映像が思い出の核として「火影」の表現で思い出されるとしたうえで、『源氏物語』ではこうした表現は少数かつ限定的であり、『狭衣物語』で初めて飛躍的な発展を遂げると述べた(4)。

まずは『源氏物語』以前の用例がどうであったかを確認しておきたい。『竹取物語』には「火影」の用例なし、『宇津保物語』は五例、『落窪物語』は二例、『源氏物語』は前掲の通り十七例であった。主体となっている人物を整理すると以下のようになる。なお、灯火の光でなく人物を指している用例は、番号の上に\*印を記した。

#### 『落窪物語』

- 6 落窪の君 少納言火影に、へいと清げなり」と

巻一・八八頁

- 7 男主人公 灯のいとあかき火影に、いと見まほしう清げに

巻一・九六頁

#### 『源氏物語』

- \*8 光源氏 御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし

帚木・六一頁

- \*9 軒端萩 かのをかしかりつる灯影ならばいかがはせむ

空蟬・一二五頁

- 10 軒端萩 灯影に見し顔思し出でらる

夕顔・一九一頁

- \*11 軒端萩 灯影の乱れたりしさまは、またさやうにても見ま

末摘花・二六六頁

- \*12 紫上 灯影の御かたはら目、頭つきなど

葵・六八頁

- 13 六条御息所 心もとなきほどの灯影に、御髪いとをかしげに

濡標・三一二頁

- 14 博士達 掲焉なる灯影に、猿楽がましくわびしげに人わろ

少女・二五頁

- 15 玉鬘 うち傾きたまへるさま、灯影にいうつくしげなり

常夏・二二二頁

#### 『宇津保物語』

- 1 あて宮 火影にさへこれはかく見ゆるぞ

嵯峨の院・三五九頁

- 2 藤英 火影に見えたる姿、限りなくめづらし

祭の使・四九五頁

- 3 帝 書に向かひたる火影、顔、有様、いとめでたし

蔵開中・四五三頁

- \*4 藤英 右大弁、むかしの藤英なりし、火影姿思ひて

国譲下・三〇三頁

- 5 いぬ宮 灯影の明かきに、いぬ宮の、いと白ううつくしげに

- 16 明石女御 灯影の御姿世になくうつくしげなるに  
若菜下・一九二頁
- 17 雲居雁 明らかなる灯影をさすがに恥ぢたまへるさまも憎  
からず  
横笛・三六一頁
- 18 夕霧 化粧じて出でたまふを灯影に見出して  
夕霧・四七五頁
- 19 大君 心にくきほどなる火影に、御髪のかほれかかりた  
るを  
総角・二三四頁
- \*20 大君 何心もなくやつれたまへる墨染の灯影を  
総角・二三五頁
- \*21 浮舟 心に入れて見たまへる灯影、さらにここと見ゆる  
ところなく  
東屋・七二頁
- \*22 浮舟 昨夜の灯影のいとおほどかなりしも  
東屋・七四頁
- 23 女童 これが顔、まづかの灯影に見たまひしそれなり  
浮舟・一二〇頁
- 24 老尼君 灯影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて  
手習・三三〇頁

全体を通して女君に対する用例が多く、垣間見や対面の際に灯さ  
れていた灯火、もしくはそれに照らされた姿を述べたものが中心と  
なるらしいことが、この時点で見えてくる。しかし用例1や6にみ

えるように、やはり女君自身というよりは女君を照らす灯火としての  
の用いられることの方が多くに思われる。男君が女君の美しい  
容姿を知る場面ではあるが、これによって男君が女君をどう受け止  
めたかという点については余り見えてこないようだ。

ただし、人物の印象を示す語としての使用が全くないかというと、  
そうは言い切れない。用例2は七夕の宴の折に学生であった藤英が  
正頼に見出され歩み出た際の様子、用例4は後年催された七夕の宴  
にて藤英がその折を思い返ししながら和歌を詠んだ際の様子である。  
男女の恋物語とはかわりのない場面であり、思い返すのも自分自  
身であるという点を看過することはできないが、「火影姿」は明確  
に人物を指示した表現である。その場の印象的な景物として登場人  
物の姿を照らした「火影」があり、それが後に回想で象徴的に用い  
られたという例では、これが初出と考えることもできよう。

とはいえ、『源氏物語』でも印象や回想につながる表現の例は多  
くない。たとえば大君の用例は、19、20の二つとも宇治の屋敷で薫  
と何事もなく一夜を明かした時の様子であるが、後年、薫がこの時  
の情景を回想することはない。また、浮舟の二例も回想ではあるが、  
男君が見たものではなく、中の君の女房達が見た様子である。やは  
り『源氏物語』では、人物の印象的な映像とその回想という意味で  
の「火影」という表現は十分に発達していなかったと考えられる。  
そうした中で用例9、10、11の軒端萩には、灯火に見た人物とそ  
の印象を取り上げるといふ特徴を強くみることができる。場面を引

用し、整理していく。

灯近うともしたり。母屋の中柱に側める人やわが心かくるとまづ目とどめたまへば、《中略》いま一人は東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小袷だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげにつぶつと肥えてそぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ、口いと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下がり端、肩のほつきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人と見えたり。(空蟬・一二〇頁)

空蟬を慕つて屋敷へやつて来た光源氏は、空蟬と軒端萩が碁を打っている様子を垣間見する。暑いためか几帳を上げて「灯近うともし」であつたので、室内がよく見えた。光源氏の立ち位置からは、柱に近い所に居た空蟬より東向きの方がよく見えたようで、服装や身体つきなどが詳細に描写されている。

光源氏はそのまま寢所に忍び込み、寝ていた女君と逢瀬を持つ。

戸放ちつる童もそなたに入りて臥しぬれば、とばかりそら寝して、灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる。《中略》若き人は何心なくいとうまどろみたる

べし。かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳の隙間に、暗けれど、うちみじろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。君は入り給ひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に、二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひよりはものものしくおぼゆれど、思ほしもよらずかし。いぎたなきさまなどぞあやしく変りて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましくけれど、人違へとたどりて見えんもをこがましく、あやしと思ふべし、本意の人を尋ねよらむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなうをここにこそ思はめと思す。かのをかしかりつる火影ならばいかかはせむに思しなるも、わるき御心浅さなめりかし。(空蟬・一二三・一二五頁)

忍び込んだ寢所は「灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなる」状態であつた。光は乏しく、人の判別はできない。空蟬も光源氏の侵入を知った訳ではなく、「かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふ」誰かが「うちみじろき寄るけはひ」を察知して、「ともかくも思ひ分かれず」と、人物を推し量る間もなくその場を去つたのである。光源氏も同様に寝ている人物の判別はついておらず、近寄つて初めて空蟬とは別人ということに気付くのだが、これも「ありしけ



はひよりはものものし」「いぎたなきさま」など視覚以外の差異に頼ったものであった。その上で、人違いの相手がもし「かのをかしかりつる火影ならば」と、先刻垣間見た容姿を思い返すのである。

その後二人が再び逢瀬を持つことはなかったが、文などのやりとりをする度に光源氏は垣間見た姿を「火影」と思い返すこととなる。「残るところなく見」えた姿と、その後の顛末が、光源氏に強い印象を残したのであろう。

注目しておきたいのは、灯火に見た「火影」を印象深い姿として回想する際、その回想でも「火影」という語が用いられている点である。他者を回想・思慕する語としては「面影」が、『源氏物語』本文中だけで三十四例用いられているが、軒端萩が「面影」で表現される例はない。光源氏が回想する軒端萩は常に「火影」なのである。

一方で、他の人物や「月影」に関しては、回想・思慕には「面影」が使われることも多い。例として、須磨出立の際の紫の上は「月影」に明々と照らし出されているが、出立する光源氏が思い返すのは紫の上の「面影」である。

御簾卷きあげて端に誘ひきこえたまへば、女君泣き沈みたまへる、ためらひてゐざり出でたまへる、月影に、いみじうをかしげにてゐたまへり。《中略》明けはてなばはしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。道すがら面影につと添ひて、胸もふ

たがりながら、御舟に乗りたまひぬ。(須磨・一八五・一八六頁)

光源氏の誘いに応えて端近に寄って来た紫の上は、「月影」にはつきりとその姿を照らし出されている。その姿を眺めた後、光源氏は夜が明けないうちに須磨へ出立したが、道中思い起こすのは紫の上の「月影」ではなく「面影」であった。紫の上にはこの例を含め、光源氏や夕霧から「面影」を思慕される例が九例存在するが、軒端萩に対する「面影」の例は一つもない。

これらの例から考えるに、同じく人物を回想・思慕する際に用いる語としても、「火影」と「月影」「面影」には差異があるように思われる。「火影」は男君が女君の姿を見た時の情景を示す語であり、その時の印象は回想においても「面影」ではなく「火影」のまま用いられるほど深いものだったのでないだろうか。「火影」を人物の表現に用いる例が少ない中において、軒端萩に関する用例は、そうした「火影」という語の持つ役割を示唆するものである。

## 二 『狭衣物語』

次に、『源氏物語』以降の用例をみていく。

『狭衣物語』の主人公狭衣は、晩年、かつて自身が関わった女君達を回想して「さやかなりし月影、もしは灯火の光などやうにて、

少し心にくきあたりども」(巻四・三六一頁)と形容している。その出会いは一夜限りの秘めたるもの、または逢瀬を持つに至らないものなど様々にあった中で、狭衣にとって印象深く残っている女性の姿とは月光や灯火のもとに垣間見たものであったということが、この一文からもうかがわれよう。

実際、『狭衣物語』に登場する女君達は「月影」の表現を用いられる人物と「火影」を用いられる人物に使い分けがなされており、飛鳥井の姫君と式部卿宮の姫君は「月影」、女二の宮と式部卿宮の北の方は「火影」で表されているようである。両者の差異としては、先行研究では、主として「月影」が肯定的なニュアンスのみを含み、それを見る主体にとって物理的・心理的に距離があることを示唆しているのに対して、「火影」は肯定的にも否定的にも働き、近しい親密な距離を思わせるという見解となっている(5)。

これらを踏まえた上で、『狭衣物語』の用例をみていく。『狭衣物語』の「火影」は前述の通り十三例中十一例が登場人物に関わるもの、女君を指すものに限ると七例となる。先と同じく、灯火の光でなく人物を指している用例は、番号の上に\*印を記した

- \*1 狭衣  
盃持て悩みたまへる火影、常よりももの  
あはれなるけしき 巻一・五一頁
- \*2 右大臣女  
かの思ひかけざりし宵の火影  
巻一・六四頁

- \*3 老女房  
火影の姿つきなど、また見知らずあやし  
きも疎ましうて 巻一・八一頁
- 4 老女房  
この見えし火影の女の、ありし法の師に  
取らせんと 巻一・一一四頁
- \*5 狭衣  
思ひなやみたまひし火影のかたちには  
巻二・一六九頁
- \*6 今姫君  
髪を振りかけて泣きあたまへる火影の、  
心苦しげなれば 巻三・七一頁
- \*7 舞人  
脱ぎかけたる火影まばゆげなるを  
巻三・一八九頁
- \*8 式部卿宮の北の方  
火影には、さすがに似ざりけり、など思  
し出でられて 巻四・二四五頁
- \*9 式部卿宮の北の方  
とあるは、昨夜の火影の手なるべし  
巻四・二五〇頁
- 10 稚児  
火影に見し稚児の声にて  
巻四・二七七頁
- \*11 式部卿宮の北の方  
はかなかりし花のたよりの火影より始め  
巻四・二八九頁
- \*12 式部卿宮の北の方  
思ひの外に目とまりし火影、思し出でら  
れて、 巻四・三〇六頁
- \*13 女二の宮  
ほのかなりし火影にも、いとうおぼえ  
たまへりかし 巻四・三六八頁

既に指摘されている通り、『源氏物語』と比べて、人物そのものを指す「火影」の使用が飛躍的に多くなっており、人物そのものを指す例ではない用例4と10も、過去灯火のもとで見かけた姿という回想の表現になっている。女君を指す七例では、用例6の今姫君を除く全てが回想である。男君が垣間見や逢瀬の場で見る女君的印象的な美しさと、それを象徴的なものとして回想・思慕する「火影」の表現が、『狭衣物語』では強くなっていることがうかがえる。

また、「火影」で回想される三人の女君は、『源氏物語』の軒端萩と同様、男君に一度しかその姿を見せていないという共通点がある。まず用例2の右大臣の女はこれ以外に言及がなく、「思ひかけざりし宵」がいつであったのか、それが垣間見であったか逢瀬であったかも判然としない。ただ、この「火影」がやや否定的なニュアンスを含んでいることから、それが行きずりのもので、狭衣自身この後再度逢おうという気持ちを持たなかったらしいことは確かであろう。他の二人についてもみていく。女二の宮の用例13は巻四のものだが、狭衣が女二の宮の姿を見るのは巻二のことである。

・あまた立て重ねられたる几帳どもにつたひつつ壁代の中に入りたちて見たまへば、こなたは宮たちおはしますなるべし、帳の前に二所寄りふそたまへり。火の影ほのかなれば、いづれかいづれとも分れたまはず。奥の方に箏の琴をまさぐりたまひて、かたはら臥したまへるや二の宮におはすらんと、目とどむれば、

御髪のかかりなべてならで、あなをかしと見えたまへり。(巻二・一六八・一六九頁)

・箏弾きたまへるは、やがて枕にて御顔ひき淹れて臥したまへる様体なども、人に似ず、心苦しげに見たまふなど、ただかばかり見たてまつり置きて出でんが、口惜しうぞおぼえなりぬる。さばかり、御簾の外をだに、むつかしうわづらはしきあたりと思しつるは、たがひぬる御心の中、我ながら憎し。「ただかくなん、け近きほどにて見たてまつる」とばかり、かの御耳に聞こえさせざらんも、あまり埋もれいたかりぬべければ、やをら寄りて、奥の御座に少しひき入れたてまつりたまふに、思しあへず、「こは誰ぞ」と言はれたまふ御けはひ、世に知らずらうたげなり。(巻二・一七二頁)

狭衣は「火の影ほのか」な中で女二の宮と女三の宮の姉妹を垣間見する。灯火は「ほのか」ではあるが、狭衣は比較的早く女二の宮の見当をつけ、「あなをかしと見」ている。予想外の美しさであった女二の宮を奥の御座へ引き入れて強引に契るが、その動機も「ただかばかり見たてまつり置きて出でんが、口惜しう」「ただかくなん、け近きほどにて見たてまつる」と、姿を見たことに対する反応であった。見なかったことにして立ち去るのが惜しまれるほど、女二の宮の容貌は狭衣にとって魅力的だったのである。

しかしこの後、狭衣の態度を悲嘆した女二の宮は若宮を出産した



のち出家、狭衣に対する態度は冷淡なままであった。執着を捨てきれない狭衣は出家した女二の宮がいる御堂に侵入し、女二の宮への思慕を訴える。

かかる目を見て、死ぬるわざもがなとのみ思さるれば、まことに消え入りぬべき御けはひの、あるかなきかなど、ただ昔ながらにて、言ひ知らず心苦しう、らうたげなるも、《中略》いとなかなかなる心惑ひ、世の常ならねど、おほろけならず心強く押し返し、とかくも聞こえ悩ましたまはず。ただ御髪の限り所狭くおぼえて、探りのいとふさやかに触りたるぞ、なほなはいみじうかなしかりける。(巻三・一八一・一二二頁)

狭衣は塗籠に逃げ込んだ女二の宮の袖をとらえ、心情を訴える。光源の描写はなく、狭衣は「消え入りぬべき御けはひの、あるかなきか」「探りのいとふさやかに触りたる」というように、気配や髪の感触だけを感じ取りながらひたすら語りかけている。

女二の宮に拒まれ続けた狭衣はやがて彼女を解放し、御堂を後にする。そして、先刻まで側にあった「あはれなりつる御けはひなど」を「面影に苦しう恋し」く思い、自身も出家を望むのである。「面影」として思い返しているのが垣間見の時に見た「火影」ではなく「御けはひ」である点、留意しておきたい。

そして巻四、帝となった狭衣の前に、女二の宮の産んだ若宮が現

れる。

年のほどよりも大人び静まりたまへるけにや、げにもと思すに、少し涙ぐみて、眉のあたりもうち赤みて、うつぶしたまへる髪のかかり、額つきなどは、かの昔、ほのかなりし火影にも、いとうおぼえたまへりかしと御覧するに、我も涙こぼれさせたまひぬ。(巻四・三六八頁)

ここで思い返されるのは「面影」ではなく「火影」である。目の前の若宮と女二の宮を比較しているので、狭衣にとって唯一明瞭な女二の宮の姿として、「火影」を出す必要があったのであろう。

次に式部卿宮の北の方は、その立場上狭衣と逢瀬を持つことがない。狭衣がその姿を目にしたのもやはり一度きりであった。忍び歩きの途中、崩れた築地から美しい花の梢を見かけた狭衣は、ふとそちらへ立ち寄る。そこは式部卿宮の屋敷で、中には式部卿宮の北の方と姫宮がいるのが見えた。

格子の隙より火の影見ゆる所を、なほしもあらず、やをら立ち寄りて覗きたまへば、几帳どもあまた見ゆれど、押しやられなどして、奥まで見通されたり。帳の前に脇息におしかかりて経読む人、卅には足らぬほどにやと見えて、いみじうけ高う愛敬づき、見まほしきさまなど、ここら見つる人に並ぶべくもな

し。白きども、薄色などの、いとあざやかにあらぬを着て、顔などもつくるひたることは見えぬに、心より外なる髪のかかり、色あはひなど、まことしうをかしげなるを、これやさは姫君ならんと思すべけれど、さすがに聞く年のほどとは言ふべうもあらず、もてなしなども大人しうやすらかにて、この物する稚児の七八ばかりなるを、経をば読みさしつ、いとうつくしと思ひてうち笑みて見たまへるけしきなども、中将の母にやと見ゆるに、余り若うをかしげなるを、なほ、いとど怪しと見たまふ。《中略》今少しきびはに若からん姫君の御ありさまは、わが思ふことのかなふべきにやと、うれしきをばさる物にて、この見る人をも見さして出づべき心地のしたまはぬを、ありありて、いとかたくなはしき業かな、我が年のほどよりも大人しき宰相中将のありさまをなど、思ひあはせたまふにぞ、いとしげなう、あるまじきことかなと、独り笑みせられたまひける。

(巻四・二四一・二四三頁)

「火の影見ゆる」所から、屋内の様子がよく見える。克明に描写されているのは姫君ではなく、母親の北の方の方であった。狭衣は女二の宮と同様「見さして出づべき心地のしたまはぬ」と、この場を去るのが惜しい気持ちはするが、やはり年齢などから「いとかたくなはしき」と思われて、そのまま屋敷を後にする。

思いもかけない場所で美しい女君を垣間見た狭衣は、昨夜の「面

影」を忘れられないまま、姫君へ文を送る。そこへ式部卿宮の息子である宰相中将がやってきたので、狭衣は何気なく話をしながらも、宰相中将に昨夜の人物と似通うものはないかと様子を窺う。判断のよすがとするのは先刻まで浮かべていた「面影」ではなく、昨夜垣間見た「火影」であった。

夜もすがら、思はずにありがたかりつる面影を忘れたまはず、思し明かしても、かう世づかぬ心の中をも、げに知らせぬがいと口惜しければ、慰めがてら、例の、姫君の御方に聞こえたまふやうなれど、異様の心も添ひたるべし。《中略》今より後さるべき隙あらば見定めて、まことしう思ひ定めんなどと思せば、言ひも出でたまはず、中将のかたちいと清げなれど、火影には、さすがに似ざりけり、など思し出でられてうちまぼりたまふも、いかでかは知らむ。(巻四・二四三・二四五頁)

冒頭、狭衣が思い返しているのは「面影」である。狭衣が「世づかぬ心の中」と自嘲していること、「例の」姫君に文を送るのに「異様の心も添ひたるべし」と添えられていることからみて、「面影」の主は北の方であろう。折しも宰相中将がやってきたので、狭衣はその顔を見つめてみるが、「火影」には、さすがに似ざりけり」北の方の「火影」には似ていない、と結論付ける。

狭衣は姫君との婚姻を口実に北の方と文を遣り取りし、「昨夜の

火影の手」を眺めたりなどするが、北の方は病がちになり、狭衣に姫君を託して亡くなってしまふ。狭衣は姫君を引き取る支度などを整えながら、折に触れて北の方を追想する。

・はかなかりし花のたよりの火影より始め、昨夜のけはひのあはれなりしなども思し出でらるるに、更によそのこともおぼえたまはず、あはれにて、中将の君のもとに、細やかに訪ひきこえたまふことおろかならず。《中略》ほのかなりし手当り・けはひ、隈なかりし月影も、さしも心にとまりしは、物思ひの花の枝さし添ふべかりける宿世にや。(巻四・二八九頁)

・いづれを梅と分くべくもあらず、降りかかる枝ざしども、かのありしゆきずりの梢にいとよう似たるも、思ひの外に目とまりし火影、思し出でられて、いみじうあはれなれば、女君に、琴の音聞きしさまなど、語りきこえたまひて、(巻四・三〇六頁)

前者は北の方が亡くなった直後、早すぎる死に衝撃を受ける狭衣の様子である。姫君との婚姻を理由に幾度も屋敷に通う予定であった狭衣は、北の方との少ない記憶を回想しながら悲しみに暮れ、熱心に弔問に訪れる。自分と同様に悲しみに暮れているであろう姫君については、「ほのかなりし手当り・けはひ、隈なかりし月影」と、母親とは別の表現で述べられている。

後者は姫君と契った翌朝の狭衣が、庭の梢を眺めながら北の方を

回想する場面である。庭の梢は初めて北の方を垣間見た時に見かけた枝に似ているとされ、それに関連して北の方の「火影」が思い出される形となっている。

これらの例から推測するに、『狭衣物語』の「火影」には、男君が女君の姿を灯火に見た出来事それ自体が含まれているのではないだろうか。一度だけ灯火に見た女君の姿は男君に強烈な印象を残し、後々まで思慕させるに十分な記憶となるが、その思慕が浮かべるのは姿以外の記憶も含めた「面影」である。実際に女君の「火影」を想起するには、女君の具体的な容姿か出来事そのものを思い起こさせるだけの、視覚的なすがすがが必要なのではないだろうか。それはたとえば「火影」の近親者であったり、「火影」の人物から貰った文であったり、「火影」のきっかけとなった梢であったりするが、そうしたすがすがを得て初めて、男君は灯火に見た女君の「火影」を鮮やかに思い浮かべることができるのではないか。

### 三 『夜の寝覚』

続いて、『狭衣物語』同様に「火影」の用例が多い『夜の寝覚』についてもみていく。『狭衣物語』との成立年代の前後は不明ながら、倉田氏は「月影」「火影」の用法に共通点が見いだせることから、双方に影響関係が想定できることを示唆している(6)。

『夜の寝覚』の「火影」は十五例、うち十一例が女主人公である

寢覚の上に対する表現であつた。また、十一例中八例は、男君が灯火に見た寢覚の上の回想となっている。

- \*1 寢覚の上 言ひ知らずなつかしく、あはれげなりし火影はまづ思ひ出でられて 卷二・一四二頁
- \*2 寢覚の上 身を去らぬ火影の、堪へがたく思ひ出でらるるまに 卷二・一五六頁
- \*3 男主人公 押し拭ひ押し拭ひ書きたまふ火影の、いとめでたきを 卷二・一六五頁
- \*4 寢覚の上 「かの石山にて、あるかなきかなりし火影に、いとよく似たりかし」 卷二・一六九頁
- \*5 乳母 ゐざり出でたる火影も、いたく泣きたる顔したり 卷二・一九五頁
- 6 寢覚の上 さやかなる火影に類なく、夜見む玉はかくやと 卷三・二五二頁
- \*7 寢覚の上 さやかなりつる火影に、やがて魂は立ち添ひぬる心地して 卷三・二六〇頁
- \*8 寢覚の上 立ち離れ見し火影に、こよなうたちまさりて 卷三・二七七頁
- \*9 寢覚の上 見し火影より、堪へがたき思ひまさりて 卷三・二七九頁
- 10 男主人公 御帳の外なる火影の、いと暗くはあらぬなれば

卷三・三二一頁

- \*11 寢覚の上 火影のただそれとおぼゆるに、限りなく御覧ぜられつる 卷四・三二六頁

- \*12 寢覚の上 さやかなりし火影の、いといみじと消え入りまどひしけはひ 卷四・三六一頁

- \*13 寢覚の上 「火影には、すべてなぞらへに言ひ寄るべきにあらず」 卷四・三六四頁

- 14 姫君 いとほのかなる火影に、うつくしう見たてまつりたまひつつ 卷四・三八七頁

- 15 寢覚の上 御簾の外なる火影に見たてまつりたまへば 卷五・四四九頁

寢覚の上に関する用例のうち、用例1、2、4は男主人公、それ以外は帝が見た寢覚の上を回想したもので、それぞれ起点とする場面が異なっている。

まず男君だが、物語の序盤、寢覚の上は「火影」ではなく「月影」によって男主人公を惹きつけている。寢覚の上が初めて「火影」の語で描写されるのは、出産を控えた彼女を男主人公が尋ねた時である。

「なにか、かばかり隔ておぼす」とて、御殿油をにかけて見たてまつりたまふに、色は、雪などを転がしたらむやうに、そこ



ひなく白く、きよげなるに、苦しげなる面つき、いと赤くにほひて、言ふかひなく臥したまへる顔の、あざあざとめでたきさまは、「月影の、もてなし用意したまへりしは、世のつねなりけり。これをむなしくなしてむことよ」(巻二・一三二・一三三頁)

男主人公が「御殿油をかけ」て見た寢覚の上は、肌の色や表情まではつきりと見え、「月影の、もてなし用意したまへりしは、世のつねなりけり」と、これまでに見ていた「月影」が平凡なものに見えるほどの印象を男主人公に与えていた。物語全体を通して寢覚の上に用いられる「月影」「火影」の表現については既に渡辺純子氏の論考があり、氏はこの場面において、神秘的で手の届かない存在であった「月影」の女君が、近くではつきりと目にできる「火影」へと転じ、だからこそ義兄妹という関係性が男主人公の心を残酷に締め付けるのだと述べる(7)。ここで寢覚の上は、「月影」より美しい「火影」として男主人公に印象付けられるのである。

男主人公はそのまま「あるかなきかの気色、なよなよと、あはれげなる」(巻二・一三五頁)寢覚の上の傍らに添い臥すが、やがて夜が明けてしまい、「あるかなきかなりつる面影、身に近かりつるけはひ、手あたりなど」が「身を去らぬ」(巻二・一三七頁)ままその場を後にする。

これ以降、男主人公は用例1、2、4、と寢覚の上の「火影」を

思い浮かべるが、これは全て他者との比較となっている。用例1は姉である大君のもとを訪れた際、用例2と4は寢覚の上が出産した姫君を見てのことである。

・心恥づかしげにものものしき気色のあなづりにくげなるも、言ひ知らずなつかしく、あはれげなりし火影はまづ思ひ出でられて、「これを悪しとはあらねど、さらに似たまはざりけり」と思ひくらぶるに、胸うちつぶるれど、(巻二・一四二頁)

・児の君抱き移して見たてまつりたまふに、ただ今は、なにのあやめ見えぬ御顔なれども、目も及ばず、夜光りけむ玉はかくやとおぼえたまふに、あはれにかなしとは、世のつねなり。《中略》さのみ待ちつけ心やすからむことはあさましきことに思ひ離れたるを、身を去らぬ火影の、堪へがたく思ひ出でらるるまに、「今宵、さりとて、かならず」と、ありしならひに、心ときめきせられたまへるを、(巻二・一五五・一五六頁)

・この君、目もあやに、日に添へて光を添へおはするさま、あまゆゆしきを、いとあはれと見つつ、鼠鳴きしかけたまへば、物語をいと高くしかけて、高々とうち笑ひうち笑ひしたまふにほひ、「かの石山にて、あるかなきかなりし火影に、いとよく似たりかし」と、まもりたまふに、(巻二・一六九頁)

男主人公は寢覚の上の近親者を前にして、「火影」を「堪へがた



く思ひ出で」たり、「さらに似たまはざりけり」「いとよく似たりかし」と比較したりする。やはり「火影」の回想には視覚的なよすが必要とするものである。一点、「身を去らぬ火影」という、常に「火影」のことを考えているかのような表現が不審だが、『夜の寢覚』で回想される「面影」は「身を去らぬ」「身を離れぬ」など、思慕する者から離れないかのような表現が非常に多い(8)。前掲の「あるかなきかなりつる面影、『中略』身を去らぬ」もそれである。そうした「身を去らぬ」「面影」が、姫君という視覚的なよすがを得て「火影」という限定的な記憶へ移行していったと考えれば、それほど不自然ではないように思われる。

一方、もう一人の男君である帝はかねてより寢覚の上の入内を望んでおり、大皇の宮の助けを借りてその姿を垣間見る。この時は後に「月影」の語も見えず、「火影」だけが寢覚の上を照らし出すものであった。

大殿油心もとなきほどにほのかなるほど、様体小さやかに、をかしげに見えて、さやかなる火影に類なく、夜見る玉はかくやと、御心おどろかれて、『中略』火近く召し寄すれば、御几帳ども、隙間あるまじくて、御殿油まゐり寄するに、いとまばゆげに扇さし隠して、扇よりはづれて見えたる影の、さやかにすぐれたる、言ふもおろかなり。(巻三・二五二・二五三頁)

最初は「大殿油心もとなきほどにほのかなる」明かりであったが、大皇の宮によって「近く召し寄」せられ、寢覚の上の姿をあらわにさせる。「ほのかなる」明かりでさえ「類なく、夜見る玉はかくやと、御心おどろかれ」るほどの美貌であったものが、灯火を近づけることによって更に際立ち、強調させられた格好となっている。これは今までの用例とは一線を画すものであり、他の例にも増して「火影」を見た人物に強く印象づけさせる表現であるといえよう。

そのことが、帝にとってどのような影響をもたらすのか。そのまま辞去した寢覚の上の「面影」を、帝は「身に添ひぬる」ほど思慕する。しかしその思慕には「面影」だけでなく「火影」も同時に用いられていた。

・面影は身に添ひぬるやうに、わりなうおぼしめさるれば、つくづくと端近うながめさせたまひて、(巻三・二五七頁)  
・いづれの御方も、まかり上らせたまはず。御覽せむともおぼされず。さやかなりつる火影に、やがて魂は立ち添ひぬる心地して、我は我ならぬやうにおぼしめされつつ、(巻三・二六〇頁)

「面影」は「身に添ひぬる」、「火影」は「魂は立ち添ひぬる」といった方向の違いはあるが、この前後、「火影」と「面影」はほぼ同様の表現として用いられている。『狭衣物語』において「火影」は、視覚的なよすががなければ男君に意識されにくいものであり、よす

が持たない時の思慕は「面影」がその役割を担っていた。『夜の寢覚』でも、男主人公は「火影」に視覚的なやすがを必要とした。しかし、帝に限っては、思い返すやすががなくとも、寢覚の上の「火影」が意識され続けている。「ほのかなる」明かりを近付けた、その衝撃の強さが、ここにあらわれている。

「面影」も「火影」も離れない帝は、ついに寢覚の上に接近し、これを捕らえる。そして言葉を尽くして口説き、その心を和ませようとするが、寢覚の上が帝に靡くことはなかった。

かたがたおぼし忍びて、いとやはらかに、なまめかしくもてな  
させたまひて、あながちに和めて、ただうち添ひ臥いたまひて、  
わざとならねど、衣ばかりは引き交はさせたまひたるに、いみ  
じう心強う、引きくくまれたる単衣の関を、引きほころばされ  
たる絶え間より、ほのかなる身なりなど、つぶつぶと丸に、う  
つくしうおぼえて、かばかりも近きけはひ、有様は、立ち離れ  
見し火影に、このやうたちまさりて、言ひ知らずなつかしう、  
らうたうぞあるや。(巻三・二七七頁)

先行研究にて渡辺氏は、この場面の前後に「月影」が配されていることに注目し、女君との距離を示唆する「月影」が目に入らないほど、帝が「火影」に魅了されていると指摘する(9)。

実際、寢覚の上が「立ち離れ見し火影に、このやうたちまさ」つ

ていることに気付いてしまった帝は、寢覚の上への執着を一層強めて行く。まさこ君に対する「髪ざし、髪のかかり、頭つきなど、火影のただそれとおぼゆる」(巻四・三三六頁)、女御に対する「火影には、すべてなぞらへに言ひ寄るべきにあらず」(巻四・三六四頁)など、視覚的情報による「火影」は見受けられるものの、「面影」「火影」の併用は更に続いていく。

さやかなりし火影の、いといみじと消え入りまどひしけはひ、  
有様、はた、時の程も御心に離れさせたまでは、「いかにして、  
ありしばかりも、かの人に行き逢ひ見るやうもがな」(巻四・  
三六一頁)

男主人公の時に行われていた「火影」「面影」の使い分けが、帝に至って混同され続けているのは、作者の意図によるものと見てよからう。『夜の寢覚』でも本来「火影」は瞬間的な映像記憶であり、本来ならばその回想にはやすがを必要とするはずだった。あえて「火影」によすがを必要とさせないことで、帝が寢覚の上の「火影」に魅了された人物であることを強調し、男主人公の「月影」から「火影」への移行と対比させたのであろう。

#### 四 中世王朝物語

このように女君の容貌に関する印象的記憶と共に使い分けられてきた「火影」「月影」「面影」の三語であるが、「火影」を女君の印象的な姿として回想に用いる例は、これ以降一気に少なくなる。

とはいえ、「火影」の用例が全くなかった訳ではない。参考までに、平安末期から中世以降の用例を掲出する。平安後期以降の物語は成立年が判然としないものも多いため、用例整理の便宜上『風葉和歌集』以前の作とみとめられる物語（後世の改作を含む）に限定した。

##### 『とりかへばや物語』

- 1 四の君 いと暗くはあらぬ灯影に、いとさやかに細うをか  
しげなる 卷二・二六三頁
- 2 四の君 ほのかなる灯影に、いとど身もなくあはれげなる  
さまにて 卷三・三三六頁
- 3 四の君 ほのかなる灯影に、いと細やかになよなよと  
卷三・四〇八頁
- \*4 四の君 ほのかなる灯影など、あてにあえかになよなよと  
卷三・四〇九頁
- \*5 今尚侍 さにやとばかり見し灯影の、いみじうめづらしう  
卷四・四五七・四五八頁

##### 『浜松中納言物語』

- 6 五の君 火影に見れば、十七八ばかりにて 卷一・六二頁
- 7 児姫君 火影にうちまぼり給ひつつ 卷二・一六三頁
- 8 姫君 几帳の外なる火影の、心にくきほどなるを  
卷四・三三四頁

##### 『松浦宮物語』

- 9 華陽公主 ほのかなる火影に、似るものなくめでたきを  
卷一・五二頁

##### 『海人の刈藻』

- \*10 藤壺の女御 ありつる御火影のふと思ひ出でらるるにも  
卷三・一三七頁

##### 『木幡の時雨』

- 11 男主人公 ほのかなる火影入り給ひぬるを 卷一・二二頁

##### 『苔の衣』

- \*12 不明 なほありし灯影の姫君は優るらん  
春・三九頁

##### 『しのびね』

- \*13 女主人公 かのほのかなりし火影はおとるまじく見えし  
十八頁

##### 『我身にたどる姫君』

- 14 帝 ほのかなる火影なれど、まぎれむやは  
卷七・一六〇頁

「火影」全体の用例数もさることながら、人物の譬喩としての使用が、やはり『狭衣物語』『夜の寝覚』に比べると格段に減っている。

使用が多いのは『とりかへばや物語』の四の君だが、この「火影」が男君に強い印象をもたらすことはなく、「面影」などの言葉を用いての思慕さえされることはない。「面影」で語られるのは、女性に戻ってからの女主人公である。用例5はそうした女主人公に対する思慕のひとつであり、帝が女主人公と契った翌朝に、垣間見の時の「さにやとばかり見し灯影」がずっと「すずろに身を離れぬ心地」（巻四・四五八頁）であつたと述懐する場面である。垣間見の場面に明確な灯火や光源の描写はなく、「火影」と表現するため必要と思われる印象の場面が定かでない。しかし、室内で垣間見た女主人公の姿は「火影」で印象付けられたのか、「面影」同様に帝の身に付き添っている。「夜の寝覚」の帝に見た「火影」と「面影」の混同が、更に進んだ形といえるだろうか。

用例10、13は、他者との比較というすがを得た「火影」である。『海人の刈藻』は、男君が「灯をつくづく」と眺めて添ひ臥し給へるさま、言ひ知らずうつくしうなまめかしげ」（巻二・一〇二頁）な女御を垣間見して逢瀬を持ち、後に女御が産んだ子を見た時の感慨

を述べたものである。『しのびね』では「大殿油まゐる気色」（十一頁）「火明かくかかげんや」（十二頁）という明るさのもとで見た「いはんかたなくうつくし」い女主人公を忘れられない男君が、別の女性を前にして「かのほのかなりし火影」と比較する場面である。『しのびね』では前後に「面影恋ひしかるべければ」（十三頁）という表現もみられ、「面影」と「火影」の使い分けが想定される。

用例12の『苔の衣』は、用例13と同様に他の女性と「火影」を比較したものであるが、この前後に「灯影の姫君」と思しき人物の場面は出て来ず、『狭衣物語』の右大臣女と似たような行きずりの垣間見・逢瀬となつている。『苔の衣』は『狭衣物語』からの影響が指摘される（10）ところであるので、これもその一つなのかもしれない。

これらの例から言えることは、「火影」は『狭衣物語』『夜の寝覚』以降も女君の印象的な映像記憶を示す表現として少ないながらも用いられ続けていたということ、一方で回想や思慕の差異には「面影」との併用・混同がおこなわれるようになっていた可能性があることである。仕草や手触り、交わした言葉など、記憶の内容が多岐に及ぶ「面影」とは違い、「火影」の記憶はあくまで視覚という限定的なものであつた。それゆえ、「面影」との併用・混同が起ると、使用頻度では「面影」に押されることも多かったであろう。



## おわりに

以上、人物表現としての「火影」を見てきた。

『源氏物語』軒端萩の例を嚆矢として、「火影」は「月影」と同じく女君の姿を男君に印象付ける景物であり、後には女君の姿そのものとして象徴的・譬喩的に回想されてきた。神秘的で手の届かない雰囲気や暗に示す「月影」とは違い、「火影」は男君にその場で手に入れてしまいたいという感情を抱かせるほどに近しく、魅力的な雰囲気や放つ人物に用いられるものであった。

それは印象的な出来事として男君の中に強く残るが、常に空で照る「月影」とは違い、明かりが消えた後、多くは女君を手に入れる機会を再び得ることはない。「火影」はその場限りの幻影なのである。また「火影」は、灯火に照らされた女君の姿という視覚記憶以上の情報を持たない。ゆえに四六時中想起することは難しく、『狭衣物語』以降の作品においては、回想には近親者など視覚的なすがすがし必要であった。常に男君の身を離れない「面影」は、必ずしもその姿形を克明に思い浮かべているとは限らず、気配や感触、交わした言葉など、視覚以外の記憶の要素を多分に含んでいる。いっぽうで「火影」は、あくまで女君の視覚情報に限定されるがゆえに、思い返した時にはそのぶん印象的かつ鮮烈な記憶として、男君の脳裏に蘇ってくるのである。

## 注

(1) 『全文全訳古語辞典』火影の項「①ともしびの光。②ともしびに照らされた人の姿・物の形」、『日本国語大辞典』火影の項「(1) 灯火の光。灯火の炎。(2) 灯火に照らされた形。光のあたった姿。また、うす明りでできた陰影」。

(2) 倉田実「狭衣物語の灯影と月影」(『論叢狭衣物語1 本文と表現』新典社・二〇〇〇年五月一日)、渡辺順子『夜の寝覚』における「月影」「火影」(『古代文学研究(第二次) 第9号』二〇〇〇年一〇月十九日)。

(3) 本文テキストの引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)を使用した。『新編日本古典文学全集』に収載のない作品については『中世王朝物語全集』(笠間書院)を使用した。

(4) 倉田実氏は(2) 掲出の論文において「この連続し、変容されて使用される、人物呼称ともなる機能性は、『狭衣物語』が新たに獲得した表現性なのであり、巻四は自在な表現によって場面性は際立っているのである。『源氏物語』までは、「面影」の語がこの働きを担っていたが、『狭衣物語』はこの「灯影」や次に検討する「月影」にも、この働きを見いだしたのである」と述べている。なお、倉田氏は『新潮日本古典集成』(新潮社)を使っておられるため、本稿とは引用本文などに若干の差異が出ている。

(5) 倉田実氏は(2) 掲出の論文において「月影」が人物を象徴する場合は、そこに否定的なニュアンスはなく、逆にその人物の美



質を賛美することに働いていた。「灯影」が否定的にも肯定的にも働くのとはこの点で相違している」と述べる。同様の意見としては、河添房江氏の「光源氏の身体と装いをめぐって」（『源氏物語時空論』東京大学出版会・二〇〇五年十二月）に「『源氏物語』の世界で、『灯影』と『月影』はみごとに描き分けられていて、『月影』は、見る主体にとって物理的、心理的に距離のある人の月に映える美しい姿をかたどるものである。それに対して『灯影』は、もっと距離の近いかいま見や、恋人である女君を灯火の光で見る場面など、親密な関係にある女性の姿をエロティックにかたどるという印象が深い」とある。河添氏の論は光源氏と夕霧の「火影」に対する言及であるが、人物に対する「火影」の用例は『源氏物語』から用例が見られること、『狭衣物語』に『源氏物語』からの影響が多く指摘されることなどを考えると、『源氏物語』以降の作品についても一考の余地があろう。

（6）倉田実氏（2）掲出の論文に「狭衣物語の灯影と月影」（『論叢狭衣物語1 本文と表現』新典社・二〇〇〇年五月一日）「なお、成立の先後関係の必ずしも明らかではない『夜の寝覚』でも、『灯影』と『月影』には特徴的な使用法が見られる。《中略》『狭衣物語』と共通する用法であり、影響関係も想定できるかも知れない」とある。

（7）渡辺純子『夜の寝覚』における「月影」「火影」「もはや、女主人公は男主人公にとって、手の届かないおぼろげな『月影』で

はなく、近くではつきりと目にできる——だからこそ義兄妹という隔てが残酷に心を締め付ける——存在、『火影』なのである」。

（8）「昨夜の面影は身を離れず」（巻一・四二）、「見えむかひつらむ面影、身に離れぬに」（巻一・五一・五二頁）、「あるかなきかなりつる面影、身に近かりつるけはひ、手あたりなど、身を去らぬやうなるに」（巻二・一三七頁）、「推し量らるる面影の、ただ今向かひたる心地して」（巻二・二二〇頁）、「耳につき、面影に見え、《中略》身に添ふ魂もなき心地に」（巻四・三九六頁）、「面影離れたまはず恋しきに」（巻五・四四九頁）の六例。『夜の寝覚』散文中の「面影」の用例は十四例、うち女君を指すものは九例。

（9）渡辺純子『夜の寝覚』における「月影」「火影」「帝が女主人公に「かぐや姫」的な光を見ていないわけではない。以前に間近で垣間見た「火影」が、あまりにも強く焼き付いていて、「心理的に距離のある」という「月影」は、視界に残らないのである」。なお、「心理的に距離のある」は（5）に前掲した河添房江氏「光源氏の身体と装いを巡って」からの引用である。

（10）加藤奈保子『苔の衣』の人物形成——『狭衣物語』撰取の方法」（『大妻国文』三〇号・一九九九年三月）、大倉比呂志「『苔の衣』の構想——『狭衣物語』との関連を中心に」（『学苑』八七九号・二〇一四年一月）ほか。

【付記】本稿は平成二十七年・二十八年度井上円了記念研究助成の



## **“the firelight” in the story of Medieval Dynasty - focused on the symbolic motif -**

SHITO, Aya

“the firelight” is one of the motif in the story of Medieval Dynasty. For example, “the tale of Sagoromo” has two symbolic motif for the ladies, “the moonlight ” and “the firelight”. Especially, for the love scene, “the moonlight ” and “the firelight” pick out the ladies for the hero. Needless to say, It seems very important motif.

However, there are few thesis on “the firelight”. Only “the moonlight ” has many thesis, and we did not take notice of “the firelight”. Though “the tale of Sagoromo” has many “the firelight” and the ladies “the firelight” pick out.

So in this paper, I research the stories of Medieval Dynasty, including “the tale of Genji”, and think about why “the firelight” was not take notice for thesis. It must has some reason or other.